

## 牧師室から(2021.3.21)

丁度 10 年前の東日本大震災津波の時のことである。

外出先から帰宅ができないで避難所で 3 泊してから、やっと教会に戻って来た鈴木牧師と私は、教会員の安否確認を急いでした。しかし、電話も、車も使えなかったので、瓦礫の間をあっちこっち歩き回るしかない状態であった。何日か経って、やっと何とか道ができたとしてもガソリンがない。

そのような状況の中で、あるところから水と食品、それと一緒に少しのガソリンが届いた。本当に嬉しかった。その時に近くの伝道所のある婦人の娘さんが津波に流されて遺体安置所に遺体が置かれているかも知れないが、車で 1 時間ぐらい離れているので、行きたくてもガソリンがなくて行けないということを知った。教会員を通して連絡をし、ガソリンを分けることができた。彼女は何度も感謝の挨拶をしてから、急いで出かけた。

彼女が通っていた伝道所は普段から交流があり、私も何度か礼拝説教をしたことがあったので、親しみを覚えていた。彼女は縫い物がとても上手で、婦人たちにも教えたり、教会歴に沿った、つまりイースターやクリスマスのための作品を作って伝道所に飾ったりしていた。私も可愛い手作りのブローチをいくつかいただいた。

彼女は仕事をしている娘さん夫婦のために二人の幼いお孫ちゃんの手をしながら、小さな群れであった伝道所の奉仕を献身的にしていた。

その彼女の娘さんが仕事先で津波に遭い流されてしまったのだ。そして、何日か経ってから、仕事場から結構離れたところで遺体が見つかり、その近くの安置所に置かれた。彼女が行って見た時は、娘さんの遺体は水で顔と体が膨らみ、傷だらけになっていて、初めは娘さんだとは分からなかったようである。着ていた服と結婚指輪で娘さんであることがやっと確認できたと言う。

何日か過ぎてから、挨拶に来た彼女から聞いた話である。事情を聞きながら何を言えいいのか分からず、ただ座っている私に彼女は言った。「やっと分かりました。今まで私は神様が独り子を私のために送ってくださり、私を救うために十字架の上で死なせたということもいつも告白していました。しかし、口だけでした。娘の死を通して、神様の痛み、苦しみがどのようなものであったのか、その恵みをやっと分かった気がします」。胸に手を置いて涙を流しながら、彼女はそのように言っていた。私は驚きと共に深い感動を受けた。

愛する娘が幼い二人の子どもを残して無残な死に遭ったのにもかかわらず、彼女は一生懸命にあなたを信じて来たのになぜ私にこのようなことがあるのですか、と、神様に向かって拳を上げるのではなく、彼女はその試練の中で神様の愛と恵みを見ていたのだ。

わたしも涙を抑えることができず、つい声を出して泣いてしまった。しかし、その涙は痛み、悲しみのためだけではない、それを越えた神様の不思議な御手を感じての涙であった。

私は、その時の彼女を、彼女の告白を決して忘れることはできない。

(鈴木善姫牧師)